

新型コロナと人間

COVID-19 and human being

梶山女学園大学文化情報学部教授
黒田 由彦

Yoshihiko Kuroda

梶山女学園大学人間関係学部准教授
三浦 隆宏

Takahiro Miura

梶山女学園大学人間関係学部教授
杉藤 重信

Shigenobu Sugito

杉藤主任研究員：第2回人間講座を始めます。梶山人間学研究センター研究員の杉藤重信と申します。今回の講座の進め方としまして、まず、私から、主旨の説明を含め、人類学から見た新型コロナウイルスについてお話します。引き続き、黒田さんから、災害社会学の視点からお話をいただいた後、私と黒田さんの話についてのコメントを三浦さんからいただきます。最後に三人で総合討論を行うという流れとなっています。よろしくお願いいたします。

さて、新型コロナウイルスのような人獣共通感染症が誕生した経緯は、人間の経済活動が関わっていると言われています。開発やそれに伴う環境破壊がもとの寄主を人間社会に近づけてしまい、結果として新たなウイルスへの感染の機会を増やしたということです。未知のウイルスである新型コロナウイルスは、様々な人類の叡智を結集して対処しなければならぬのですが、地球上の国家はばらばらで、国際組織WHO（世界保健機関）がありながらも、なかなか協調的な対策をとれ

ていないのが現状です。

感染の拡大を防ぐには、相互接触を回避すればいいというのが共通認識であり、長い人類史の中でもそうしてきましたが、完全に接触を回避してしまうと、私たちの社会は成立しなくなってしまいます。人類文化や人類社会の在り方に根底的に抵触してしまうのです。医学の立場からではなく、人類学、社会学あるいは哲学といった人文科学、ヒューマニティーズに近い分野、社会科学と言ってもいいかもしれませんが、そこからのアプローチが必要ではないかと思い、今回の講座を用意いたしました。

【人類学から見た新型コロナ現象】

ではまず、人類がどのような仕組みで現代社会を作り上げてきたのかということから見ていきたいと思います。人類学者の西田正規さんは「ある時から人類の社会は、逃げる社会から逃げない社会へ、あるいは逃げられる社会から逃げられない社会へと生き方の基本戦略を大きく変えた」とおっしゃっています。西田さんは、この変化を「定住革命」と

呼んでいます。約一万年前に、ヨーロッパや西アジア、日本においても同じようなタイミングで「定住社会」が生まれています。西田さんはこれを「逃げない社会が生まれた」という言い方をしておられます。

もう少し詳しく見ていきます。人類の祖先は霊長類の仲間で、もともとはアフリカの森林地帯の樹上で生活していました。鋭い歯も爪も、強い筋力も持たず、おそらく捕食するよりも、むしろ捕食される側だったと考えられます。環境の変化により、樹上での生活が難しくなると、地上に降りて生活するようになりました。地上に降りると、顔が平面的になりました。遠くを見渡すことが有利に働くようになりました。また、立ち上がって両手が自由になると、肩が回るようになり、物を投げられるようにもなりました。さらに体毛がなくなりクールダウンができるようになると、持久力を獲得するという進化の過程をたどってきました。道具を作り出すよりも先に、持久力を使ってひたすら獲物を追いかけて、弱ったところを獲得し、広い範囲を動き回って獲物を獲得していました。雑食の延長線で肉や骨のエネルギーを獲得して、結果的に脳を発達させ、様々な能力を身に付けて現在に至っています。

ところが一万数千年前の気候変動で、広い範囲を動き回る生活が難しくなり、定住、集住して耕作を始めるようになりました。農業を始め、人口も増えてきます。そして、集住している居住地に獲物を追ってやって来た動物を家畜として身近なところに置くようになりました。

もともと捕食されていたものが、道具を使って捕食するようになっていくというのは

とても大きな変化だと思います。その結果、環境に依存している社会から、自ら環境を変化させていくようになります。例えば、火を使うようになったのは大きな変化の一つです。まさに現代社会の第一歩を記したのが「逃げる社会から逃げない社会へ」ということなのです。

しかし、残念ながら我々に様々なトレードオフがやってきました。その一つが感染症です。感染症が蔓延するのは、感染源と感染先が分離できなくなって、感染が拡大するからです。人間に感染しはじめた新たなエマージェントウイルスは、集住することがデメリットになって感染を続けてしまうのです。おそらく感染症は人間社会であれ、動物であれ、免れることはできないでしょう。逃げられないので余計にリスクは高くなります。かつてであれば、感染源から逃げればよかったものを、定住したために逃げ出せなくなった、あるいは逃げ出さないという状況を自ら選択していると言えるかもしれません。これが「定住革命」と言われるものです。

もともと人間は移動しながら暮らしていましたが、定住し、農業をすることによって定着の道を選びました。そのため「ソーシャルディスタンスが近い」という感染症蔓延のもう一つの条件を整えることになったのです。そういう意味で、ウイルスとの戦いは、定住を始めた人類にとって宿命になってしまいました。定住の行き着く先は過密で、現代の日本の満員電車がいい例です。

もう一点、人類学の視点からお話します。最近トレンドな人類学のトピックに「マルチ・スピーシスの人類学」というものがあります。日本では、立教大学の奥野克巳さんが

中心となり議論が行われています。先ほど西田さんの人類史のところでお話したように、初期の人類にとって他の生物との関連は、まさに食うか食われるかといったところでしたが、農業を始めたことにより環境に干渉するようになりました。例えば、火を使って森を燃やすというような典型的な干渉から始まり、その後の様々な干渉で、公害、温暖化など環境を大きく変化させ、現在私たちはしっぺ返しを受けている状況です。感染症も人間の開発や環境を悪化させた結果なのです。

そういったところから人類学では、人間中心主義を再考するという発想が生まれてきました。その流れに沿って誕生したのが「マルチ・スピーシスの人類学」の考え方です。奥野さんによると、人類学の思想において、他の生物との関係を踏まえたのは、まず一つはクロード・レヴィ＝ストロースの「Good to Think」という視点だと言います。これは人間社会で、相手と自分が違うということを表わすのにトーテム、ある種のエンブレムを使って区別しようとするものです。その時に使ったのが、「空を飛ぶもの」と「地を這うもの」は違う動物であるといったような動物の分類のアナロジーです。全く同じ姿形をしている人間を、動物を使って二つのグループに分類するというのがクロード・レヴィ＝ストロースの構造主義人類学です。

もう一つは、唯物論人類学を唱えたマービン・ハリスの「Good to Eat」です。インドのヒンドゥー教では教義によって、牛は食べてはならない、殺してはならないとされていますが、そうした経済外的な強制の部分で人間と牛との関係を説明するものではありません。インドの南北では環境の違いによって農

業の在り方も違うので、当然牛の利用の仕方にも違います。乳製品を多くとるような地域では雄牛はいらないから、雄牛の子供を殺して種牛だけ残します。一方耕作するところでは、力の強い雄牛を残しています。食べることに関連して動物を考えるということをいっただいたのが、マービン・ハリスです。

もう一つは、フェミニスト人類学のダナ・ハラウェイがペットとの関係を論じた「Good to Live With」という考えです。ペットを中心に「マルチ・スピーシスの人類学」に通じる見方というのを提案し、他の生物との共生を主張しています。

我々は家畜との関係のみならず、自然界にいる動物とも様々な関係を取り結んでいます。この夏はドングリが不作で、熊が里に下りてくるということがありましたが、人間が引き起こした温暖化が影響しているかもしれません。逆に言うと熊の生息域に近いところに村があるということも熊が容易に近づく理由かもしれません。人間と野生動物にはそういう関係があるのです。

さらに私たちの食生活を考えてみます。私たちの体内には膨大な数の微生物が存在していて、その微生物の存在なくしては消化するというのもままならないのです。言ってみれば彼らとの共生関係を通じて、健康を維持できているのです。そう考えると新型コロナウイルスも唾棄すべき存在かもしれませんが、何らかの形で共生も考えに入れる必要があるのではないかと人類学の視点からは思えてくるのです。「定住革命」と「マルチ・スピーシスの人類学」の考え方を取り入れたウイルスとの共生というと極端に響くかもしれませんが、そのようなポイントで人類学の視点か

らお話ししました。

次は黒田さんにバトンタッチします。

[社会学から見た新型コロナ]

黒田由彦氏：では、「新型コロナウイルスと社会」というテーマで社会学の視点からお話をさせていただきます。

まず、三つの問題提起をしたいと思います(スライド1)。「新型コロナウイルス感染症」という言葉は長いので、国際的に使われている「COVID-19」という言葉を使わせていただきます。

3つの問題提起

1. COVID-19は、日本の社会システムが内包する脆弱性(システムの機能不全)を暴露した。これは今後も変わらないのだろうか?
2. COVID-19は、現代社会がリスク社会であることを再認識させた。しかし、リスクの社会的管理には成功しておらず、さまざまな形で社会に分断が生じている
3. COVID-19は、短期的にはグローバリゼーションの障壁となっている。では、中長期的にはどうなのだろうか?

スライド1

COVID-19は、日本の社会システムが内包する脆弱性(システムの機能不全)を暴露しましたが、これは今後も変わらないのでしょうか。脆弱性を暴露して、それを是正する方向に行くのか、あるいは脆弱性はそのまま脆弱性として続いてしまうのかというのが一番目の問題です。

COVID-19は、現代社会がリスク社会であることを再認識させました。もともと地球上には局地的に様々なウイルス感染症があったのですが、互いの交渉が少ない間は、感染症はあまり広がりませんでした。ところが社会と社会の往来が激しくなると、様々なウイルス感染症が外に広がり、いわゆるパンデミック

という現象が起きてしまうようになります。まさにこれは社会が発展することによって生み出されたリスクなのです。リスクが起ったとき、そのリスクを管理する力が働くはずなのですが、その社会的管理は、今のところ成功していないようです。むしろ様々な形で社会に分断やひずみが生じているのではないかというのが二番目の問題です。

三番目の問題です。COVID-19は、短期的にはグローバリゼーションの障壁となっています。国と国の間での往来が大幅に減少し、飛行機もあまり飛んでいませんし、飛んでいる飛行機もガラガラという状態です。短期的にはグローバリゼーションが止まったように思われるのですが、中長期的にはどうなのでしょう。一、二、三と小さい視点からだんだん大きな視点になっているのですが、順番に説明したいと思います。

第一に、日本の社会システムがどういう脆弱性を抱えているかという問題です(スライド2)。日本は官主導国家とか官僚制が政治を裏でコントロールしていると言われていますが、今回もそうとしか言いようがない状況が露呈しました。一番典型的な例は、首相が「PCR検査を増やす」と言ったのに全く増えず、なぜ増えないのかという理由もわから

日本の社会システムが内包する脆弱性

- ・政治が官僚機構をコントロールできない
- ・科学的知識を政治や官僚機構が評価できない
- ・官僚機構の硬直性のため、最先端の科学技術が生かされない
- ・政府が市場の足を引っ張り、グローバルな動きに遅れをとる

スライド2

ず、またその説明もないということがありました。いかに政治が官僚機構をコントロールできていないかということが明らかになりました。政治主導の制度設計になっていることは事実なのですが、実際そのシステム自体が作動していないのです。

最初に指摘したいのは、科学的知識を政治や官僚機構が正当に評価できないという問題です。今回は感染症に関わる様々な学者が動員され、その学者グループの発言が4月のいわゆる都市封鎖、緊急事態宣言につながっていきました。第一波が収まってくると、社会が止まり経済に打撃を与えたということで、科学者たちは遠ざけられ、現在は経済をまわすということと感染症をコントロールするということを両輪にしています。第一波の際の緊急事態宣言のどこがどう悪かったのか、何が間違っていたのかということは不問にふされています。科学者は、政治家や官僚機構に都合のいいように使われているだけで、科学的知識の独立性はありません。

3月、4月には、「アメリカの疾病管理予防センターのようなものを日本にも作らなければならない」と言われていましたが、日本の感染症に対する制度設計が遅れているということがはっきりしたのにも関わらず、最近はそのような議論がありません。つまり科学的な知識を政治や官僚機構は評価できず、きちんとその独立性を担保しながら社会にどう生かすかということについて、システムティックな対応がないのです。だから国民が「感染症に対する対策が最優先だ」と言うと緊急事態宣言を出して経済を止めるのですが、経済の被害が大きくなると逆に感染拡大に多少目をつぶって経済を優先させるということが起

こるわけです。

さらに官僚機構の硬直性のために、最先端の科学技術が生かされていないということがあります。COVID-19のような感染症は、人と人との接触で広がっていくので、人と人の接触を減少させることが大事です。そして、誰と誰が接触して、誰から誰にうつったかをいち早く把握して、そしてその情報を広めるということが大切で、そのためにICTを使おうと思えば使えたわけです。ICTを使い、最初に感染を抑え込むことに成功したのが台湾です。日本はICTの最先進国の一つだと標榜しながら、できませんでした。今「COCOA」というアプリケーションがありますが、それを徹底的に広めようということもなされていません。厚生労働省が作ったマイナーなアプリケーションに留まっています。何かをやろうとすると、いろいろな法律の壁があるのですが、それを誰も超えようとしません。官僚機構というのは硬直性を持つのですが、それを超えるのが政治家の役目です。感染症の予防のためには特例措置として、個人情報保護に関する一定の規制緩和があってもいいかもしれないのですが、そのような議論は全くありません。

それから、政府が市場の足を引っ張り、グローバルな動きに後れをとりました。日本は官僚主導型の社会なので、規制緩和や市場経済、ネオリベリズムという動きに加担しているように見えながら、様々な規制が社会の隅々まで張り巡らされているのです。例えばPCR検査の機械は、政府がお墨付きを与えたものしか使えない、それ以外はだめだということがありました。韓国は徹底的にPCR検査をやって感染源の人を隔離するという方

向を固めていましたし、日本も迅速に対応すべきではなかったのでしょうか。日本は世界全体で見ると感染者数は少ないのですが、東アジアの中では一番です。アメリカ、ブラジル、イギリス、フランスと比較すると、日本の少なさが目立つので、日本モデルは成功したという見方もあります。東アジアの中においてみると必ずしもそうとは言えません。「反省すべき点は反省してしなければならない」「客観的、科学的に日本の社会の問題を洗い出して、それを次に生かして直していこう」という声も出てこないというのが、日本の社会システムの脆弱性でこれが第一の論点です。

次はリスク管理の行方についてです（スライド3）。先ほど少しお話しましたが、豊かな社会を実現するための営み、経済を発展させるために科学技術を進めようという営み、それ自体がリスクを作り出します。例えば、社会が進歩し、エネルギーをたくさん使うことによってCO₂が排出されます。それが温室ガスとなり、地球を覆って温度が上昇する地球温暖化の問題が生じました。まさに社会の発展が生み出した問題で、このような状況に到達した社会をリスク社会というわけです。

リスク管理の行方

- ・ リスク社会とは、豊かな社会を実現するための営み自身が新たなリスクをつくりだすような社会である
- ・ もともと局地的なものに留まっていたウイルスが、経済活動のグローバル化によって、全世界に拡散した
- ・ 未知のウイルスというリスクは、先進社会と発展途上国の格差を超えており、それは医学が最も発達した先進国にCOVID-19で大きな被害が出ていることにあらわれている
- ・ 新たなリスクの前で、様々な分断が生じており、リスクをどう管理していくかについて答えがみえない状況である

スライド3

ウイルスも、もともとは局地的なものに留

まっていたのですが、経済活動がグローバル化され世界中に広まりました。今回の新型コロナウイルスは、中国の武漢から世界に拡散していったということですが、おそらく500年前だったらここまで広まっていなかったでしょう。かつてヨーロッパでペストが流行してかなり人口が減りましたが、今回のようなパンデミックになるというのは、おそらくスペイン風邪以来で、これほど短期間で広がったのは経済活動のグローバル化が背景にあるのは間違いありません。これは典型的なリスク社会的現象です。これまではリスクと認識されたら、リスク管理が作動して抑え込んでいました。例えば、資本主義という経済システムが必然的に抱える不況や恐慌というリスクは、ケインズが考えた有効需要創出政策によって解決されました。20世紀半ば以降は、リスクを社会的に管理するという傾向が生まれますが、リスク管理というのは先進国が進んでおり、先進国と発展途上国との間には格差があります。発展途上国の貧困問題は解決していないし、衛生という面からみても発展途上国は先進国から劣っている状況です。

しかし、今回のCOVID-19に関しては、先進国と発展途上国の格差は全く関係ありません。今一番感染者数が多いのはアメリカです。世界で最も豊かで、医学が発展している国で一番大きな被害が出ています。アメリカといえどもこのリスク管理に関しては、今のところ制御できていないのです。

新しいリスクが目の前に広がっていくと、社会には様々な分断が生じていきます。このCOVID-19は中国から広がったのだから、世界に対して責任を負うべきだとアメリカの大統領が中国を非難しました。国と国との分

断がまず起きています。同時に社会の中では、例えば、マスクをする人とならない人の分断、感染対策をする人とならない人の分断、あるいは自粛をする人とならない人との分断など、いろいろな分断が起きました。このウイルスに対処する協力的な動きももちろんありますが、同時に分断の動きも起こってしまいます。この分断をどう管理していくかについては、一人ひとりが気をつけるという個人に任されています。

「新しい生活様式」ということが政府から言われていますが、「新しい生活様式」が国民に浸透すればウイルスが完全に抑え込まれるほど、事は簡単ではありません。抑え込まれない間は、いろいろな分断や争いごとが絶えないのだろーと思ひます。ワクチンと特效薬の開発と普及に成功すれば、抑え込むことができるでしょう。インフルエンザがそうでした。しかし、このウイルスの管理がうまくいったとしても、またいつ未知のウイルスが出てくるかわかりません。ここで収まって、5年後10年後また出てくるかもしれません。

人に感染するコロナウイルスは1960年代に発見されました。COVID-19以前には、SARS、MARが猛威をふるいました。このようにどんどん新しいウイルスが生み出されるのです。突然登場して世界中に蔓延する感染症のリスク管理をどうすればいいかについては、確定的な答がまだない状態です。

三番目です(スライド4)。1980年代以降、世界のトレンドだったグローバリゼーションですが、「グローバリゼーション」という言葉は1990年代に生まれました。このCOVID-19によって、グローバルな規模での人々の往来が劇的に減少しました。しかし物流は動

グローバリゼーション2.0?

- COVID-19によってグローバルな規模での人々の往来が劇的に減少した
- 経済活動が打撃を受け、先進国のGDPは過去最大のマイナス成長となる見込みである
- 1980年代後半以降、世界のトレンドであったグローバリゼーションに対して冷や水を浴びせている
- では、中長期的にみてどうか?
- 後世から見て、世界史の大きな転換となる出来事になるのか、それとも...

スライド4

いているので、グローバリゼーション自体は、半分くらいは動いています。金融の世界も恐慌のようにはなっていませんし、むしろ株価は上がっています。航空業界や一部の業界は壊滅的な打撃を受けています。経済活動は打撃を受け、先進国のGDPは過去最大のマイナス成長になる見込みです。おそらく来年も続くでしょう。グローバリゼーションはいくつかの反作用があつて、最初の反作用と言われているのが1997年のアジア経済危機です。次がその10年後の2008年のリーマンショックです。それがなんとか癒えてきたところに、今回のCOVID-19です。三回目のパンチを食らって、グローバリゼーションというのは中長期的にみてどうなるのでしょうか。後の世界からみて、世界史上大きな転換期となる出来事になるのでしょうか。

しかしワクチンができれば、もとのグローバリゼーションに戻っていく可能性もあります。ただCOVID-19以前に、グローバリゼーションに反するような大きな動きが二つ出ています。一つはトランプ大統領にみられるような自国を第一と考える先進国が出てきたことです。これまで、グローバリゼーションを主導し、最先端にいたアメリカやイギリスが、そっぽを向いているのです。そういう流

れがあった中でのCOVID-19でした。2010年代の末に起きたいくつかの出来事は、ひょっとするとグローバリゼーションの進化系か、あるいは頓挫か、いずれにせよグローバリゼーション1.0は終わり、グローバリゼーション2.0と言えるのかもしれないということを問題提起したいと思います。以上です。

[哲学・倫理学からのコメント]

杉藤主任研究員：次に、私と黒田さんの報告についてのコメントをいただきたいと思います。三浦さんよろしく願いいたします。

三浦隆宏氏：コメントといいますと、報告された先生方に質問を投げかけるという形が多いかと思いますが、問題提起はすでに黒田先生からなされていますし、杉藤先生の報告も、私たちの社会がどういう形で成り立ったのかという射程の広いものですので、お二人の先生方の報告と視聴している皆さんとの間のクッションという感じで、お二人の先生がそれぞれ述べられたいくつかの言葉をピックアップし、哲学・倫理学の観点から四つにまとめてきました。

まず一つ目ですが、杉藤先生の報告の後半で、「人間中心主義の再考」「人間中心的な視点からの脱却」という言葉がありましたが、これは環境倫理学での「人間中心主義 vs. 人間非中心主義」という言葉を想起させます(スライド5)。環境問題については、黒田先生の報告の中でも出てきました。人間中心主義というのは「持続可能な開発」というスローガンに顕著なように「開発」(＝経済成長)を疑いのない前提としたうえで、環境との両立を目指す立場です。開発をすると環境破壊

1. 「人間中心主義」「人間中心的」という言葉

- ・環境倫理学での「人間中心主義vs人間非中心主義」を想起
- ・人間中心主義：「持続可能な開発」というスローガンに顕著なように、「開発」(＝経済成長)を疑いのない前提としたうえで、環境との両立を目指す立場
→環境破壊は一向に止まらず
↓
- ・人間非中心主義(あるいはディープ・エコロジー)という立場
- ・極端な話、環境(生態系)にとって一番良いのは人類が減ること? (＝エコファシズム)

スライド5

が起き、地球温暖化などがどんどん進んでいきます。それではだめだということで「人間非中心主義」を主張する環境倫理学者もいます。この「人間非中心主義」は「ディープ・エコロジー」とも言われ、深い環境倫理を唱える立場です。極端な話、「人間非中心主義」を進めていくと、結局環境や生態系にとって一番いいのは人類が減ることなのです。なのでエコファシズムという批判もありますが、これはこれでなかなかラディカルな立場だという方もいます。このあたりが新型コロナウイルスとどう関連づけられるのかわかりませんが、一つ目としてあげておきます。

二つ目は「新型コロナウイルスとの共生」についてです(スライド6)。杉藤先生の報告の中にありましたが「共生の難しさ」という意味でのリンク付けです。イタリアの哲学者にジョルジョ・アガンベンという人がいます。イタリアで新型コロナウイルスの拡大がひどくなる前の2月末に、彼は「エビデミックの発明」と題する短文を発表しました。そして「生き延びること以外の価値を持たない社会になっていいのか?」という問いを出して、いろいろな論議呼びました。その中で、アガンベンは、「移動の自由」と「死者の権利」について言及しています。死者たちが、葬式

2. 「新型コロナウィルスとの共生」

- ・アガンベンの「死者の権利」を想起
 - ＝死者たちが葬式もされないまま埋葬されていることを批判
- ・志村けんさんや岡江久美子さん死去の際の映像→コロナは怖いという強烈なイメージを私たちに与えた
- ・〔補足〕アガンベン（1942-）：イタリアの哲学者。2月末に「エビデミックの発明」と題する短文を発表。そこでの「生き延びること以外の価値を持たない社会になっていいのか？」という問いが論議を呼ぶ
- ・彼の問いの中核には主権（≒主権力）批判（この災厄を機に主権国家の例外化措置が火事場泥棒的に拡大すること）がある点に留意

スライド6

もされないまま埋葬されているということ批判したのですが、これについては映像を憶えている方も多いと思います。日本でも、芸能人の志村けんさんと岡江久美子さんが新型コロナウイルスに感染し亡くなりました。お葬式もできず、遺骨だけが玄関先に置かれるという非常にショッキングな映像でした。新型コロナウイルスで死んでしまったら、死者と生者とが最期に一緒に時間を過ごすことすらできないということです。あれから半年くらいが経ちますが、私はなかなかあのイメージから抜け出せないままです。極端なイメージを持っているのかもしれませんが、新型コロナウイルスと社会は今のところ共生できているとは言えないのではないのでしょうか。そういうことを想起しましたので二つ目にあげました。

三つ目は黒田先生の報告の中で何度も使われていた言葉「リスク社会」についてです（スライド7）。「リスク社会」というと、ベックという著名なドイツの社会学者を思い出します。黒田先生が、グローバリゼーションを問いとして問題提起されていましたが、ベックも「リスク社会ではリスクがグローバルに作用する」と述べています。それから「リスクの世界には専門主義から抜け出す脱専門化や

3. 「リスク社会」

- ・ベック（1944-2015）のリスク社会論
- ・リスク社会ではリスクがグローバルに作用する
- ・リスクの理解には専門主義から抜け出す脱専門化や超専門化が必要
- ・Cf. コリンズ+エヴァンズが提唱する「対話型専門知」（奥田太郎監訳『専門知を再考する』名古屋大学出版会）
- ・「対話型専門知の習得は、社会学者、民俗学者、社会人類学者が首尾よく参与観察を行ううえでほぼ同じかたちで必要とされるだけでなく、特定分野の専門知をもつジャーナリストの目標でもあり、これは、営業職や（中略）経営者にも必要とされる」（p.38）

スライド7

超専門化が必要だ」とも述べています。私は彼の著書『リスク社会』を読んでいませんので、これは他の本からの受け売りです。詳しい話はこの後の黒田先生とのディスカッションで補足していただけると助かります。新型コロナウイルスに関しては、最初、疫学的な視点からの提言が多く、「新しい生活様式」や「ソーシャルディスタンス」などしっくりこない言葉が多々ありましたので、こういう専門主義や脱専門化という点についても、この後議論できたらいいと思います。

ちなみに、名古屋大学出版会からこの春に出版された『専門知を再考する』という本に「対話型専門知の習得は、社会学者、民族学者、社会人類学者が首尾よく参与観察を行ううえでほぼ同じかたちで必要とされるだけでなく、特定分野の専門知を持つジャーナリストの目標であり、これは営業職や（中略）経営者にも必要とされる」とありました。杉藤先生は人類学者ですし、黒田先生は社会学者ですので、お二人の先生方はおそらく気づかない間にこの対話型専門知を習得されているのではないかと思います。

四つ目は、黒田先生の報告の中にあつた「分断」というという言葉です（スライド8）。これに関しては、私とほぼ同世代の哲学者、

4. 「分断」という言葉

- ・哲学者の東浩紀(1971-)は、先のアガンベンの問いを妥当としつつ、みんなが「個体の生」しか考えず、生き延びることだけを考える世界では、「人が互いに分断されて、連帯できなくなる」との危惧を表明(「生き延びる命とは」朝日新聞、8月5日付)
- ・人間は決して「個体の生」のみを至上の価値として生きているわけではない。なぜなら、命とは「個体の生を超える生」でもあるから
- ・ウイルスは国境を越えているが、各国のそれへの対応は逆に国境で分断されている。「分からない」をベースに連帯するしかない
→コロナ禍は「世界共和国」への第一歩? (大澤真幸+國分功一郎『コロナ時代の哲学』左右社)

スライド8

東浩紀さんが、先のアガンベンの「生き延びる以外の価値を持たない社会になっていいのか?」という問いを、妥当な問いかけだとしつつ、私たち一人ひとりが個体の生を生きているわけだけど、個体の生しか考えず、その個体の生が生き延びることだけを考える世界だと、「人が互いに分断されて、連帯できなくなる」という危惧を表明していました。「私たち人間は決して個体の生のみを至上の価値として生きているわけではない。なぜなら命とは個体の生を超える生でもあるから」と新聞のインタビューで述べています。ウイルスは、国境を越えて広がり、それに対する各国の対応は、逆に国境で分断されている状態です。東さんは「分からないをベースに連帯するしかない」と言っています。これに関しては、社会学者の大澤真幸さんと國分功一郎さんが対談をしていました。もしかしたら今視聴されている方も手に取ったかもしれません。『コロナ時代の哲学』という小さな本です。そこで大澤さんは「コロナ禍というのは、世界共和国への第一歩になるのかもしれない。それはずっと先のこともかもしれないけれど一応言うておく」と述べています。つまりコロナ禍において、今は国際連合なども機能していないが、ゆくゆくは世界が協力し合う

ような関係になる第一歩となるかもしれないということです。これを最後に出しておきたいと思います。短いですが、これで終わります。

[総合討論]

杉藤主任研究員：どうもありがとうございます。それでは三人で話していきたいと思います。口切りとして、少し私の方から申し上げます。私が画面の背景に使っているのはクライストチャーチの街角の写真です(スライド9)。ご承知のように2011年2月22日、東日本大震災の起こるほぼひと月前に、クライストチャーチで大きな地震がありました。ビルが一つ壊れ、日本人の留学生が二十数人亡くなり、街の機能も失われました。その後2013年と2年ほど前にも私はクライストチャーチを訪ねこの写真を撮りました。



スライド9

なぜこの写真の話から始めるかというと、地震とは、まさに大地が揺れることで、その大地にのまれて亡くなるというのは、地震によって人の生が奪われたということになりますが、建物が壊れたことにより人の生が奪われるというのは、人間が殺したに等しいのではないかと思うのです。私はオーストラリアのアボリジニを対象にフィールドワークをし

ています。アボリジニはかつてユーカリの林の中で、非常に簡便な雨露しのぐ程度の葉っぱの屋根の小屋で暮らしていました。もしこのような家が崩壊したとしても誰も亡くなることはないでしょう。そう考えると地震のような大きな災害で建物が壊れて人が亡くなってしまったら、これは災害という言葉を使っていますが、間接的に人間が人を殺していると言えるのではないのでしょうか。3月11日の東日本大震災の時も「15mの大堤防を築いているから安心だ」と言って避難しなかった人たちがたくさん亡くなっています。これは大堤防を作る人間の営みが、彼らを避難から遠ざけ、生命を奪ったのです。

新型コロナウイルスについては、感染するようになったのは人間の側で、新型コロナウイルスには責任の負いようありません。挙句の果てに新型コロナウイルスを撲滅するため、治療薬を出し、ワクチンを作って感染を少なくするというのは、人間的なエゴと言えるのではないのでしょうか。三浦さんのコメントに対してうまく返せていないと思いますが、むしろ「共生」という言葉をアガンベンのような切り口ではなく、新型コロナウイルス感染症の拡大は災害で、人間が引き起こしたものとして捉えるのではなく、私たちはウイルスと共生する必要があるのではないかということをお話したかったのです。

黒田さんは3.11の後、東北に行かれて、いろいろと報告されていますよね。あの時、堤防を乗り越えた津波に巻き込まれてたくさんの方が亡くなっているのですが、避難が遅れたのは、堤防があるから大丈夫だと思った人が結構多かったからではないのでしょうか。黒田氏：象徴的なのが仙台の荒浜というところ

です。周りが全部水に浸かってしまい、屋上に取り残された人たちがいた小学校の校舎を覚えていませんか？そこは砂浜がずっと続いている太平洋側の海で、高さ6mの堤防が1970年代までに築られました。6mというのは、昭和にあった津波がそれくらいだったからで、6mの高さがあれば人々を守れるということだったのです。その堤防の横には、伊達政宗が造った運河があり、高さ10mくらいの松の防風林が約100mの幅であり、その先に農地が広がっています。人は海から2kmくらい離れたところにしか住んでいませんでした。それは津波が来るからです。東北のあたりは津波常襲地で、津波のことをよく知っています。後世の人に教えるため、かつて津波が到達したところに神社を作ったのですが、近代化の中、特に戦後、堤防を作ったためにそういうことが忘れ去られてしまうのです。堤防ができると、防風林を切り開き、海から数100mくらいしか離れていないところに住宅地を造りました。以前だったら住まないところに住宅を造り、今回の津波で建物はすべて流され、多くの犠牲者を出しました。津波から一か月後に行ったのですが、浴室の浴槽がむき出しになった横に、ランドセルとやかんが転がっている様など、ものすごく生々しい光景で声も出ませんでした。津波は10mくらいの高さで、海から2kmくらいのところまで到達したそうです。この時「想定外」という言葉が生まれたのですが、まさに想定外でした。近代社会の発展によって、大丈夫だと思われたところに住宅を造った結果、犠牲になった方が増えたということであり、まさに新しいリスクです。今後このようなことがあってはならないということで、い

ろいろな防災対策、あるいは復興計画が立てられました。津波で流された場所は危険地に指定され、法的に住宅を建てることができなくなりました。東北の津波被害に関しては人災といえる部分が結構あったというのが正直なところでは。これは災害の社会的な一つの例です。

杉藤主任研究員：先ほど黒田さんのお話にあったリスクについてですが、官僚機構の問題、政治と科学の問題など現代社会の限界性、あるいは障壁がかえって新型コロナウイルスの蔓延に手を貸したという面はありますよね。アメリカでも新型コロナウイルス対策をあまり重要視しない政権であるがゆえの感染者の増加というのがあるのではないかと考えています。まさに人間社会の宿痼^{しゆくあ}で、人間社会が持っている構造自体が感染症も含めた災害を招き寄せてしまっているという仕組みがあるのではないかという気がします。三浦さんいかがですか？

三浦氏：津波の被害に何度もあってきた三陸地方では、家族や集落の全滅を防ぐために語り継がれてきた「津波てんでんこ」という言い伝えがあります。津波の時は家族さえ構わずに、一人でも高台に走って逃げろという意味なのですが、これにのっとして人々は逃げたのでしょうか。私の知っている限りでは、小学校に集まって結局高台には行かずに犠牲になったということだったと思いますが、「津波てんでんこ」が生かされていないかったのでしょうか。

黒田氏：大川小学校の悲劇ですね。大川小学校が特殊な例で、他の地域はだいたい逃げていました。大川小学校の悲劇と対になっているのが、釜石の奇跡です。99.8%の子供が助

かっています。海辺にあった小中学校の子供たちは土曜日の昼だったので、全員下校していました。先生たちは「子供たちは助からないのではないか」と思っていたらしいのですが、子供たちは自主的に大人を引っ張って避難していたのです。一度ハザードマップに指定された避難所に逃げるのですが、ここでは危ないと目視して判断し、もっと上に逃げて助かったのです。これは「津波てんでんこ」の教えを教訓とした防災教育をずっとやっていたからです。その当時、群馬大学の片田敏孝先生が釜石市の小中学校で「想定外が起こるからハザードマップは信じるな、自分の目を信じろ」という防災教育をしていました。インドネシアのスマトラ沖地震津波の映像を繰り返し見せて、「とにかく逃げろ。みんなてんでばらばらに逃げろ」と教えていました。子供たちはこれを素直に受け入れました。実は数日前にも津波警報が出ていたのですが、この時は数十センチの津波でした。今回もどうせそんなものだろうと思ったのかもかもしれません。ところが実際はすごい津波だったのです。子供たちに大人が助けられたというのが釜石の奇跡です。これは先ほど三浦先生がおっしゃった専門知ではない例ですよ。専門家はいなければならないのですが、同時に知識を社会に埋め戻すということも必要だと思います。新型コロナウイルスも同じです。専門的な知識を持っている人は絶対に正しくて、我々はその知識を正確に学びさえすればいいというわけではありません。感染症と公衆衛生とは専門性が違うのです。必ずしも専門家の中で一致しているわけではなく、専門家の中でも対立があり、それ自体が分断を生むのです。ですから、専門知は、市

民の中で咀嚼^{そしやく}され集団知になっていくことが大事だと思います。

杉藤主任研究員：専門知を集団知に変えるというのはなかなか難しいことだと思います。ある種の専門知を学生に伝えるというのが我々の仕事の一部だと思います。大学であれば、教員と学生の関係が明確ですが、例えば地域などでは、関係が多様で曖昧になってくるので、それを伝えるチャンネルは難しいのではないかと思います。例えば新型コロナウイルス、震災など突発的な事例をうまく活用して専門知を集団知、もしくは一般知に近づけていく、それと交り合わせていくという方法はないのでしょうか。三浦さんがやっている哲学カフェというのは、方法の一つではないかと思うのですが。

三浦氏：そうですね。街中で一般の人たちと対話をして、そこからうまくいけば合意形成すなわちコンセンサスを得るということもあるので、哲学カフェは集団知を鍛える一つの手法かもしれません。サイエンスカフェという形でやっている方もいます。

黒田氏：「対話型専門知」を説明していただけますか？

三浦氏：詳しくは『専門知を再考する』という本を読んでください（笑）。暗黙知の一つらしいです。熟達した人らが経験的に暗に持っている知ですね。ですからフィールドワークなどを通じて鍛えられている知ではないかと思います。

杉藤主任研究員：自分自身がそういう知を持っていると言われるとよくわかりませんが、私たちは「参与観察」という言葉を使っています。単に横から見ている観察ではなく、当事者性を持ちつつ現場のコミュニ

ティーの中に入って、自分も一緒に関わり、現地の人の考えをより理解するということは経験しています。それが先ほどの専門知と集団知の話につながるのかはよくわかりません。地域社会学で黒田さんはコミュニティー研究であちこちに行ってらっしゃいますが、そういうときも住民と対話をしているのですか？

黒田氏：対話というか調査です。地域社会学者の数だけ調査のやり方があり、人によって全然違います。私は質的調査をしています。質的調査とアンケートを配ってそれを集計する量的調査、どちらも一長一短あるので、という手法でも使えるようにしています。私は、「その地域の問題は地域の人に聞かないとわからない」ということを確信しています。その地域の人がどう把握して、どう見ていて、どうしようとしているのか。必ずそういう人がいます。そういう人たちにたどり着くまで、いろいろとインタビューを重ねていきます。一回のインタビューではわからないのです。その地域にそういう感情を持って、それこそ暗黙知と言えるかもしれませんが、そこでしかわからないような経験が積み重ねられているのです。人類学のようにそこに住むわけではないので参与観察とまではいきませんが、それでしか見えないものがわかるまで徹底的にいろいろなことを聞き回ります。他方、地元の中の知識だけでもだめです。例えば、被災した後、どうやって復興するか、復興資金は上からくるのですが、それがどういう制度になっているのか、どこでどういう意思決定がなされてどこまで決められるのか、どういうふうに言えば政府に伝わるのか、政府も市、県、国と仕組みが違うのです。

そういうところは地元の人からは見えてない部分もあります。あるいは見たくない部分があったり、自分が住んでいるところに関しては感情の部分がとても大きいので、ただ単に反発をするということもあるわけです。求められれば「こうなのではないか」と提案することもあります。そういう意味で専門知や対話的専門知は大事だなと思います。若い学者は、その地域にどっぷり入り込んで地元の人と結婚する人もいます。そこに一生住んで人生をかけるというスタンスの学者もこの震災で出てきました。それもありだなと思います。

三浦氏：黒田先生は歩き回るとおっしゃりましたが、現地に自分の身体ごとに行くということが大事ですか？今はネット社会ですので、話を聞いたり、定期的な関係を持つには、今この講座自体がオンラインで行われているように、オンラインでのインタビューという方法もあるような気がするのですが、やはり住民の方々の言葉を拾い集めるためには、社会学者、研究者は自分の身体ごとに行かなければいけませんか？二者択一ではないかもしれませんが。

黒田氏：これも人によって違うのですが、私は現場に行くのが基本だと確信しています。社会学がそうだと言っているわけではありません。私にとって現場に行くということは、聞くとか見るだけではなくて、五感なのです。ですから私は学生に「行った瞬間から五感ですべての情報が集まっているはずだ」「あれは何だったのかという違和感を手掛かりにしていろいろなことがわかるんだよ」と話しています。皆さんも日常生活で人と話している時に違和感を持ったことがあると思いますが、地域に行くとかたくさん違和感があって、

何度も通うとそれがわかるのです。「なぜこのような対応になったのか」、「今日はなぜこんなにつっけんどんなのか」という違和感があったり、風景に違和感があったりもします。その風景の違和感、いろいろなところを比べるわけです。そうすると地域の風景というのは全部違うのです。人には普通の日本の風景ですが、我々から見ると、雑草がどこに生えているかということでその地域、その自治体の公共サービスの質のようなものがある程度予測できるのです。

三浦氏：探偵のようですね！

黒田氏：そうかもしれません。結構その辺の地域差は普通の人が考えているより大きいものがあって、きちんと治まっているところ、住民の声が反映されているところ、あるいはそのシステムを住民が維持しているところとそうでないところは決定的に違うのです。

杉藤主任研究員：新型コロナウイルスの場合は、とにかく人と接触することはだめと言われてますから、まさに文化人類学者たちはどこにも行けなくなってしまいました。

黒田氏：社会学も同じです。

杉藤主任研究員：人と会って話をするによって調査が成立する我々は、こういう状況でどうすればいいのでしょうか。文化人類学会でも話をしていますが、なかなか決め手がありません。専門家同士の話であればネットで対話を成立させることは可能だと思いますが、例えば、隣のおばあさんにZoomを使って話を聞かせてくださいというのは、なかなか至難の業です。ある意味新たな局面に出会ってしまったという感じです。

黒田氏：新型コロナウイルスはまだ1年経っていませんよね。数年経ってこれが、デフォ

ルトになってくると、また違った展開があるかなと思っています。

杉藤主任研究員：もう少し緩和されて接触のチャンネルが可能になったら、この時の経験を問い直すという形で復元できるのですが、この状況が長く続いた場合、復元も困難になってしまうのではないかと思いますのですね。

黒田氏：このインフラが前提となって社会関係が組み直される可能性があります。

杉藤主任研究員：そうするとこういうデバイスを使ったインタビューがデフォルトになるということですか？

黒田氏：Face to Faceコミュニケーションというのは、バーバルな言葉によるコミュニケーションとノンバーバルの総合なのです。コミュニケーション論的に言うと、いろいろな情報が連なっているわけです。例えば、こ

のZoomの状況だけで、情報を読み取っていくという人間関係はどうなのかということはいましばらく経ってみたいとわかりません。

杉藤主任研究員：例えば今、私や黒田さんが使っている背景は、私という存在以外の情報すべてをシャットダウンしているわけです。従来私たちがインタビューしているとき、その人が座っている部屋にどのようなものが置かれているかということを参考にしながら、話の接ぎ穂をやっていました。それがこのような背景を使ってコミュニケーションをするとは何も情報がなくて、しかも固定カメラなのでたとえ背景を使わなかったとしても、読み取れる情報というのは非常に限られてきます。ですから、ちょっと難儀なセカンドステージかなと思います。



スライド9



スライド11



スライド10



スライド12

杉藤主任研究員：先ほどまで、私はニュージーランドのクライストチャーチの街並みの背景、黒田さんは富士山を背景に使って話していましたが(スライド9再掲、10)、背景を取ってみました(スライド11、12)。このような状況で話している我々をご覧になって、視聴されている皆さんはどのようにお感じになるのでしょうか。新型コロナウイルスに巻き込まれた我々の社会は、ネットを通じてコミュニケーションができていう状態です。背景を取ってコンテキストが増えた段階と先ほどのように背景を使って意図的なコンテキスト情報のみを示す画面と何が違うのかアンケートにお書きいただけると幸いです。

三浦さんに先ほどもお聞きしたと思いますが、Zoomなどを使った哲学カフェというプロジェクトの説明をお願いしますか？(スライド13)



スライド13

三浦氏：私は2013年の4月から約6年間、名古屋の伏見のカフェで月に一回のペースで哲学カフェをやっていました。しかし、2月を最後に私自身はカフェで対話はしていません。ややとげのある言い方かもしれませんが、Zoomを使って嬉々としていくつもの哲学カフェに参加している方々がいるということを耳にします。オンラインだと場所へ行く

手間が省けるので、時間さえずれていればいくつものはしごする方がいらっしゃるのです。私はそういうのが苦手で、哲学カフェをオンラインにするのには二の足を踏んでいます。なのでカフェではなくて、会議やイベントでオンライン形式をいくつかやっています。授業だと学生が部屋などを見られたくないからか顔を出さずにアイコンが並んでいる状態なのでやりにくいのですが、一般の方々は、後ろを隠したりして顔を出して参加してくれるのであまりやりにくさを感じません。ただ私が講義や話をする時は、こちらの方でコンテンツがあるので、それを伝えるということに重きを置いています。黒田先生の話に関連するかもしれませんが、哲学カフェは、話されている内容などではなく、私もその場所に行って皆さんと同じ時間と場所を共有するというに重きを置いていたのかなという感じがします。先ほど背景の話があった時に「図と地」という言葉が頭に浮かびました。オンラインでの対話は、地の背景を見せないままで図だけが浮き上がっているように捉えることができる、あるいは先ほどの黒田先生の言葉をそのまま使うと、一緒に皆さんと話すというのは、まさに五感を使う営みで、オンラインでのやり取りというのは、視覚と聴覚だけを頼りにするものなのかなと思いました。

杉藤主任研究員：哲学カフェの話や黒田さんの地域社会学でのコミュニティーへの訪問で五感を使うという話、そして私のフィールドワークも関連しているのですが、つい最近留学関係の会社の方と話をする機会がありました。留学を斡旋していた企業は四苦八苦していて、航空業界はほとんど壊滅状態になっています。国は鎖国をしているという状態で、

学生は留学したいと思っても行けない状態に追い込まれています。しかしオンラインであれば語学の学習だけ是可以という状況です。留学の目的が語学の学習をすることだけであれば、従来ネットで学習すればいいわけですから。なんなら書物だけでも語学の勉強はできます。

しかし、その場所に行って、自分の身体で感じるというプラスアルファの経験があるからこそ留学の意味があるのではないのでしょうか。我々が実践していることも留学の話とよく似ていて、バーチャルなものよりも現場に行き、その場の状況、環境を五感で感じる要素がないと人間理解ということも含めてうまく回らないということなのです。先ほどのグローバリゼーション2.0に引っ掛けるとしたら、グローバリゼーション2.0はどうあればいいのでしょうか。

黒田氏：必然的にグローバリゼーションは続くと思います。石油など物資が入ってきていないわけではないし、物流は止まっています。人の往来が止まっているだけです。日本はインバウンドで経済が潤っていましたから深刻です。この新型コロナウイルスは、グローバリゼーションが浸透したところを変えるのだらうというのが私の予感で、それがどこまでそういう形で変わるのかということです。例えば完璧なワクチンができたとします。そうすると京都はまた外国人であふれるのでしょうか。昨年京都の清水寺に行った時、山門に立って坂を見下ろしたのですが、98%が外国人でした。どこもそんな感じで、それで観光地は潤っていたのです。今年いくつかの観光地に行きましたが、外国人観光客のおかげで潤っていた店がつぶれてしまって、10

年くらい前のさびれた観光地のようになっているところがありました。今、地方創生がとても大変なのです。日本の地域創生は2014年に始まるのですが、ここ2、3年は観光に絞られていました。それが全部だめになってしまったのですから、もしまた同じことが起きた場合、観光だけに絞っていたら危ないと誰でも考えますよね。だから今度は違うことを考えなければならないのではないかと地方の対応を見ているとそう思います。

感染症はいつ世界のどこで起こるかわかりません。それがどの程度のものになるかわかりませんが、そのリスクを織り込んでおかなければなりません。グローバリゼーションが浸透しているところはガラッと変わっていかざるを得ないのだらうと私は思います。

杉藤主任研究員：私は、学会に参加するとき、セッションの会場に入るのはごく短い時間で、あとは廊下や控室で同じような年代の人としゃべっているのですが、このようなバーチャルなものになってくると、皆真面目にセッションの会場に入ってしまうのでしょうか。なんだか学会ではないような気がしてしまいます。

黒田氏：そのうち廊下という部屋ができますよ。

先日中国の吉林大学から「国際会議をやるう」という連絡が入りました。中国で国際会議をやるとなれば、数か月前から準備するわけですが、今回はネットの会議なので3週間前の連絡で簡単に準備ができました。

杉藤主任研究員：職場もその一つかもしれませんが、社会のシステムの中で、アフターコロナにネットに適応できる場所は、どのくらいの割合であると思いますか？

黒田氏：過半数を超えないと社会の体制にならないと言われていますが、それは違います。10%が変われば社会の体制は変わるのです。10%が変われば、その後雪崩を打って変わっていきます。どうやっても変わらない人は30%くらいはいます。

杉藤主任研究員：5%という人もいますよね。

黒田氏：そうです、大都市は5%です。田舎は1%で変わると言われています。

杉藤主任研究員：誰かイノベーターが来ればガラッと変わるのですね。

黒田氏：もともと田舎は人口が少ないですから。密じゃないですよ。おもしろいのは、リモートで仕事をする、それで十分だということがわかってきたということです。それで東京から地方に移住する人が増えています。この動きは不可逆です。日本の社会自体もグローバルな動きに対応して、組み換えが起こっていくのではないかと、期待半分で言っています。

杉藤主任研究員：ということは大澤真幸さんの言うこともまんざらではないかもしれませんが、世界共和国は無理だとしても、バージョンの変わったグローバルゼーションによって、外国人が日本社会にもっと入ってきて新しい情報、技術を持ち込むことを通じて大きく変わるということも想定内ですね。

黒田氏：最初に日本社会システムが内包する脆弱性という話をしました。その時、言わなかったのですが、日本社会はものすごく適応が遅いけれども、ちゃんと変わるのです。言い換えると、日本は確かなかなか変わらない社会ですが、いざ変えなければならなくなると徹底的に変えていくのです。徹底的に変えていくことがいいのかという問題もある

のですが。例えば、日本の明治維新はすごいじゃないですか。とんでもない改革をやりましたよね。出足は遅いけれどもやり始めたら変わるのです。これから日本にそういう変化の動きがあるかもしれません。もしもそうならば、いい方向にしていかなければいけません。

三浦氏：ハンコ文化も一気になくなるかもしれませんね。

最後に一つだけよろしいでしょうか。グローバルゼーションのいびつさという点で、東証のシステムがダウンした時に、日本の東証が海外の投資家からそっぽを向かれるという指摘がありました。マネーがグローバルに進みすぎて、一度システムダウンしてしまうと信用がガタ落ちになり、大問題になってしまうというのが気になるところです。

黒田氏：それもあるのでグローバルゼーションがすべて止まることはあり得ません。金融の世界で24時間動かないというのは完全にアウトです。日本にとって新型コロナウイルスより大きい問題かもしれません。信用の問題です。この先影響が続くかもしれません。

三浦氏：機会の損失と言っていましたね。

黒田氏：1分あったら何億か儲けることができたのに、それができなかったのですから。

杉藤主任研究員：しかも損失補填はありませんね。

黒田氏：株式市場は閉まりますが、金融市場は例えばFXだったら24時間どこかで動いているわけです。いつでも儲けられるのです。それが止まってしまったらどうするのだという感じです。

三浦氏：ちょっとそれは私たちの身体感覚か

らすると異常ですけどね。

黒田氏：グローバリゼーションというのは、身体感覚は完全に欠落しているので、必ず反作用が起きるのです。

杉藤主任研究員：グローバリゼーションというのは、世界中が一つの時計で動いていて、24時間、世界中で常にどこかが経済活動をしているのです。

黒田氏：トランプ大統領を見ていておもしろいのは、グローバリゼーションの先端を走っていたアメリカが、突然保護主義に走ったわけです。しかし、彼のおかげでアメリカの株式市場はすごく伸び、儲かりました。同じ時期に日本とアメリカに投資したら、日本は全然だめで、アメリカの株を買っている方がずっと儲かったわけです。グローバルな企業は儲かっているのです。アメリカは一見して

保護主義に走っているように見えますが、実はアメリカを発展させていて、その恩恵をワーキングクラスも受けているから、トランプ大統領を絶大に支持する人がいるのです。次の大統領はどうなるかわかりませんが。新型コロナウイルスでグローバリゼーションが全面的に止まることはありませんが、いろいろなところを変える必要がありますし、変わらなければなりません。

杉藤主任研究員：結局、新型コロナウイルスの現象が日本の脆弱性をあぶりだし、否が応でも変わらなければならない部分は、変わらざるを得ないという状況を奇しくも引っ張り込んだという感じです。結論が出たところで、第2回の人間講座を終わりたいと思います。ありがとうございました。